

【資料紹介】

大浦氏慶女墓表について

石 田 孝

Epitaph of Kei Oura

ISHIDA Takashi

Abstract

Oura Kei (1828-1884), known as a businesswoman who pioneered the export of Japanese tea, was said to be in decline in her later years. However in the last decade, it has become clear that she worked with a group of talented fellows to develop various business activities in Tokyo metropolitan area after leaving her hometown Nagasaki. This article examines her achievements by translating the Chinese text of '*Oura Shi Keijo Bohyo*', which depicts her heroic character, into modern Japanese, and explains how the plans to erect monuments in Nagasaki Park and Ueno Park came to nothing.

キーワード：大浦慶、墓表現代語訳、記念碑建立計画

はじめに

我が国製茶輸出の祖と言われている大浦慶女（1828-1884）は、明治四年の熊本藩士遠山一也がオルト商会への煙草売買契約の際、日頃世話になっていたオランダ通詞品川藤十郎からの依頼のため不承不承に連帯保証人となったが、遠山の契約不履行により手付金3,000両の半額を賠償することになり、慶女の晩年は没落不遇であったと言われ続けてきた。しかし2010年起立工商会社創業者松尾儀助の曾孫田川永吉氏が新資料を発掘して、慶女は中央に進出して横浜製鉄所を貸下され共同経営し、また海軍省高雄丸払下げなどに参画したことなどを『女丈夫大浦慶伝』で明らかにした。筆者は田川氏と交流しながら、慶女の遠山事件敗訴後の長崎での事績を調べ、当時の新聞記事などをもとに不名誉な晩年没落不遇説の反証を試み、「新説大浦慶女伝お慶さんの後半生記」を発表した。その中で彼女の記念碑建立計画についての新聞記事を紹介したが、その碑文が存在していることを知り、今日あまり知られていない「大浦氏慶女墓表」について解説し考察する。

1. 「大浦氏慶女墓表」現代語訳

重野安繹撰文¹は大浦家の系譜に始まる。

「大浦氏の名は慶で、長崎出身である。その先祖は、越前に住み足利將軍の時、上杉氏と戦い戦功を上げたので武蔵国入間郡を賜り大浦城に居住する。因って「大浦」を名乗った。その後子孫は、肥後侯加藤清正に仕え、千七百石の封禄を得たが、忠廣の時その封禄を削られたため、長崎に移り、商売を始めた。これを四郎左衛門信綱とする。信綱は長崎で油を売ることを担当し、油座方と呼ばれるようになった。彼は西海で評判が高まり、数世代を経て大右衛門という名前に至った。しかし、ある災害に遭い、財産を失ってしまった。大右衛門は死に、息子の太平次も早くに亡くなる。その一子は僧となったが、妹が白井という人物に嫁ぎ一女を生んだ。この子に外曾祖父の家を継がせた。即ち大浦慶女（以下大浦氏は慶女と訳す）である。慶女の人は剛毅で慧敏であり、発奮して家業を再び興すことを決心した。当時、彼女は十五・六歳で、少しの資金で油を売り始め、一生懸命に働き家業を営み家産をやや増やし、天草の人道田某を入婿として迎えた。慶女曰く、夫に身を委ねて事えることを選んだが、事あるごとに制約を受けて大志を伸ばすことができないと。そこで夫に離婚を申し出て、寡居することを決意した。このため、彼女は「大浦の嫠婦」と呼ばれるようになった」

「大浦の嫠婦」と呼ばれていたことは、土佐藩士の「池道之助日記」の慶応二年九月廿六日の条からも分かる。「尾浦や學者の後家有りけりこれより中濱西川私の三人対面に行きける実に発明なる女なり格別美人にてはなし富家にて手代四五人使い商業盛んに致しける四方山の咄し致し馳走にあい八つころ帰る²」とある。中濱は道之助が同道した洋行帰りのジョン万次郎こと中浜万次郎と、西川は土佐藩用達の麴屋町西川易二であり、土佐藩士らと慶女の交流関係が推測できる。

「幕府が海禁策を広く行き渡らせてより、清と蘭二国に限り長崎での貿易をさせて、商品には定められた額があり、厳しく私的な貿易は禁止された。これを犯す者は極刑に処した。しかし慶女は密かに私的な貿易を行い、相当大きな利益を得た。彼女の意中の商いとは戦と同様である。戦いとは先ず敵のことを知ることである。今彼が私のことを知り、私が彼のことを知らなければ、彼我の成否、戦の勝敗数は明白である。現在の貿易は輸入が多くて輸出が少ない。座って彼が来るのを待っていたら、利益は彼独りに行ってしまっただけである。もし別々の小さな利益に甘んじて、それによって十分であるとしたならば、将に国家百年の大計をどうしようかと。よって海外に航海し、大いに貿易を興そうと望んで、密かに蘭人テキストルに依頼し、肥前嬉野産の茶二十七斤を英米及び阿剌伯（アラビア）三国に、彦根の生糸を英米伊三国に送って、

それが売れるかどうかを試した。これが国産品を欧米各国に輸出した最初で、実に嘉永六年のことであった」

長崎の幕末明治初期の貿易は、居留地の外国商人が介在する間接貿易であって、T.B.グラバーやW.J.オルトなどの外国商人や商館への売込（輸出）やそこからの買受（輸入）であった。しかも国禁を犯しての嘉永六年（1853）蘭人テキストルへ茶のサンプルを託したことは、明治十六年九月一日から兵庫県神戸港で開催された第二回製茶共進会への慶女の上申書「長崎港製茶輸出経歴概略」の記憶違いであって、三年後に来日したオルトの履歴と併せても矛盾している。プライアン・バークカフニ氏がオルト初来日は1859年であることを既に発表し、それをフォローすべく昨年拙稿「お慶さんの後半世記」で、テキストル再来日は安政三年（1856）だったことを述べた。

「墓表」には同時期生糸のサンプルも委託しているが、文久年間から慶応年間の主要輸出品の内、茶の輸出額はおよそ横浜港60-70%、長崎港30-40%に比べて、生糸は横浜港96%以上で独占し長崎港1%未満から3%であった。後背地に養蚕業が盛んな地域の有無が関係している³。この「墓表」があまり知られていないのは、今日まで碑が建つことはなく、茶業関連資料にも取り上げられることもなく、わずかに当時の生糸関連の『蚕史』⁴や碑文集などに記載されているだけであったからであろう。生糸輸出の濫觴には諸説あるが、ほとんどが横浜港関連である中で、仏国ロンドー氏著書によると、1858年日本の生糸を初めて欧州が輸入したとの説は、横浜の相場によっては長崎へ運んで巨利を得た近江商人もいて、良質な曾代糸が開港以前に長崎から輸出されたとの説と符合する⁵。慶女が長崎に出入りする近江商人と交流して取引したのかは不詳である。

「たまたま英国船が長島[ママ]⁶に到着し、慶女は密かにその士官に自分の意向を伝え、木箱に身を隠して貨物の中に混ざって、夜その艦に乗込んだ。二十六歳の時であった。当時日本人は海外の事情に詳しくなく、畏れるのはただ妖怪だけではなく外国人も同様だった。それでも慶女は女性ながら毅然として顧みず、極刑を犯して異国へ航海した。女丈夫と言うべきである。印度洋に至って病にかかり、志を果たすことなく帰国することになった。偶然、イギリス商人オルトと同船し、彼が示したのは日本茶一包で、それは以前蘭人に託した物であった。慶女はその奇遇を不思議に思い、長崎に帰り着くとオルトと緊密に交流し、よって日本茶を各国に輸出し、一方で生糸や蠟の取引にも及んだ。商品代や輸送費は常に数十拾万金を下らず、秘密のことに属すると雖も、海外では隠然たる勢力を持っている。この時貿易の端初が開かれた」

慶女の密航説は女丈夫ぶりを示すには格好の材料であるが、二十六歳の時と言えば安政元年の頃であり、「長崎港製茶輸出経歴概略」とは辻褄が合うが、既に指摘したように三年時を下らなければならない。また繰り返しになるが生糸や蠶についても裏付けできる資料がない。蠶の輸出額については慶応三年（1867）だけであるが、横浜港約5%長崎港約95%であり、木蠶生産地との距離の遠近が関係している。長崎港からの輸出先は、英国とオランダであった⁷。

「安政五年通商条約が締結され、各国競って来日し貿易が開始された。日本の商人たちは呆然自失して、慶女だけが計略に習熟し思慮深くこれに悠然と対処した。そこで西海三陸二羽近江等の諸州に人を派遣して、茶一万斤と生糸を若干得て、茶を米國に生糸を英國に輸出した。しかし、日本の商人たちは、まだ茶と絹の貿易が利益を生むことを知らず、これらの商品を集めることは困難であった。慶女はこれを憂い、諸州に勧奨誘導し、茶樹を栽培させ養蚕をさせて、その供給販売の道を拡大させた。ここになって内外の貿易に関する権利を皆手中にして、大浦寡婦の名は近くでも遠くでも評判になった。当時江戸幕府が衰退し、尊王攘夷の議論が沸騰した。長崎に流れ住む志士たちと慶女はすべて親しく交流して、密に彼らの活動を支援した。彼らは長崎と京都や大阪などを頻繁に往来していた。特に小松帯刀、坂本龍馬、横井小楠、高杉晋作、大隈重信、松方正義、陸奥宗光の諸氏とは親交が深かった。かつて慶女が夜中に街を歩いていると背後から襲撃され、倒れて手や腕を傷め、帯は真二つに切れたが、刃は身体に及ばなかったため、傷もやがて治った」

薩摩藩家老の小松帯刀は文久元年（1861）水雷研究ため二ヶ月間長崎に滞在し、慶応元年（1865）にも一ヶ月間滞在して、伊藤博文や井上馨を西浜町の薩摩藩蔵屋敷に招き会談⁸、さらに翌年には長崎に坂本龍馬や陸奥宗光らの亀山社中を支援した。横井小楠は嘉永六年（1853）十月下旬長崎を訪ね、露国使節（プチャーチン）応接の為来崎予定の幕吏川路聖謨（十二月九日着）を待つが会えずに帰路につく⁹。二度目は文久三年（1863）八月福井から熊本への帰途長崎に十九日に着き一週間滞在しているが¹⁰、どこで接点があったのだろうか。高杉晋作は文久二年（1862）に江戸から長崎へ来て、上海に五代友厚らと渡るまでの三ヶ月間ほど滞在して、崇福寺内居住の宣教師ウィリアムズとフルベッキを訪ね、アメリカ南北戦争や中国の太平天国の乱などについて対談して、フルベッキの日本語学習はキリスト教布教のためであると警戒している。その他慶応元・二年にも伊藤博文と長崎を訪れ滞在して、英学修業やグラバーと汽船購入の契約を結んだりしているが¹¹、慶女との交流を示す資料はない。

慶女が交流支援した三人が、大隈八太郎（重信）、松方助左衛門（正義）、伊達小次

郎や錦戸広樹こと陸奥宗光であり、彼らは油屋町の大浦家屋敷の裏手にある製茶場の二階に屯して居たと言われている。佐賀藩の大隈は文久年間から長崎を往来し、元治元年（1864）代品方になって以来、明治元年外国事務局判事となり年末に上京するまで足掛け五年満三年長崎に滞在している¹²。薩摩藩の松方は慶応二年（1866）御船奉行添役軍艦掛として来崎し、明治元年長崎裁判所参謀となり同年閏四月日田県知事に赴任するまで、鹿児島・長崎間を往来すること五回、長崎駐在延べにしておよそ十四ヶ月ほどであるが、維新时期土佐藩の佐々木三四郎（高行）と共に長崎の騒擾鎮定を主導した¹³。陸奥は慶応元年坂本龍馬らと長崎に来て、亀山社中や海援隊で海運・商事に従事し、龍馬から「大小を取り上げても飯を食へるものは俺と陸奥だけ¹⁴」との評価を得ていた。慶女は龍馬や陸奥ら海援隊の庇護者と言われるが、史料はない。同三年九月隊士らと長崎を離れ、明治元年正月外国事務局御用掛として明治政府に出仕した。その後兵庫県や神奈川県知事を歴任、また出身地和歌山藩執事として渡欧し、さらに明治十一年八月には西南戦争の際に反政府的行動に加担した容疑で、禁固五年の刑を受けたりしているので、長崎を再訪したという記録もなく、維新後慶女との接点があったとは考え難い。

これに対して大隈・松方両氏とは、長崎でも中央でも接触交流の機会があったと考える。明治五年（1872）慶女が遠山事件裁判で敗訴した二・三ヶ月後、大隈参議は東京より長崎までの燈台建設と電信架設大方落成につき、十一月十二日から十五日まで長崎に滞在し、この間伊王島燈台や小菅修船場、鮑ノ浦制鉄所を巡視し大浦電信局訪れているが、綾子夫人同伴であり、公式行事のない日があった¹⁵。同七年「征台の役」では、大隈参議は台湾蕃地事務局長官に任命され、兵站部として長崎の久留米藩邸跡に蕃地事務局支局が設けられた。大隈は四月十七日から一ヶ月余り長崎に滞在し、宿舎は東小島町の高島秋帆旧邸であったことが、随行していた内務大丞兼地理頭杉浦讓の日誌に「宝亭」と記されている。ここは慶女没後の居宅跡を譲り受けた松尾浅吉が、明治三年に開いた料亭であった¹⁶。

一方、松方は明治五年には、租税権頭として十月十二日長崎運上所が大蔵省租税寮管轄となり、事務引継のため来崎しているが、前述大隈が来崎する一ヶ月前のことで、慶女が遠山事件の判決により失意のどん底に陥った時期であった。また慶女褒賞と関連ある共進会は、同十一・十二年松方が渡欧し農商事業の保護奨励を探究して、共進会創設を大久保内務・大隈大蔵両卿へ具申したことによる¹⁷。

また慶女の晩年の肖像写真（長崎歴史文化博物館蔵）の裏面に大蔵省の「東京印刷局写真」とあることから、松方が大蔵卿時代（明治十四年十月二十一日-明治十八年十二月二十二日）の物と言われている。明治三十七年（1904）十一月には、日本赤十字社社長として来崎し、慶女居宅跡の油屋町宝屋旅館に二泊している。当時長崎

を訪れる知名士の多くは、万才町の高級旅館上野屋に宿泊するのが常であったが、彼はかつて世話になった大浦家の名残ある建物や庭に接しながら、慶女に幼い頃可愛がられた女将松尾シナと慶女の懐旧談に浸ったのかもしれない¹⁸。

「やがて明治維新になり、かつて支援した諸氏が皆政府の高い重要な地位に就いた。慶女の計画はますます大きくなり、炭鉱を開発して船艦を建造し、米穀商勸業諸會社を起し磚茶を製造した。計画創設したのは数多い。しかしながら事業は先細り、家の財産も次第に衰え、次に病気に罹り、明治十七年四月十七日[ママ]¹⁹に57歳で亡くなり、長崎の長照寺に先祖の墓の隣に埋葬された。亡くなる数日前に公文書が届けられ、婦女の身を以て率先して外輸の功を成したことを褒賞された」

慶女の炭鉱開発についての資料はないが、かつて横浜製鉄所を政府から貸下げ共同経営した長崎出身の杉山徳三郎は、蒸気機関のスペシャルポンプで筑豊炭田の目尾炭坑を経営し発展成功させている。また船艦建造については、同郷の平野富二（現IHI創業者）も横浜製鉄所共同経営の時期があり、また同製鉄所を石川島平野造船所の分工場として造船業を営んでいることと関係しているのだろうか。米穀商勸業諸會社については、慶女より二十歳若く長崎恵比寿町の貿易商穀物商の家に生まれた松尾巳代治が、彼女より先に明治七年横浜へ進出し、翌年商業視察のため米国へ渡り、同十二年には横浜の有力な製茶売込商十二人からなる茶商協同組結成に加わっている。慶女没後の十九年五月には長崎製茶貿易商社を創立し取締役となり、その後九州製茶輸出株式会社の社長に就き、長崎、九州の製茶輸出を主導した人物である²⁰。これら炭鉱造船米穀商などの事業に慶女が関与したかを詳らかにする資料を持ち合わせていないが、経営に携わらなくても発起人出資者の一員であった可能性がある。明治十三年福岡の豪商佐野弥平や村上義太郎と組んで海軍省軍艦高雄丸払下げ購入後の数カ月後には、横浜製鉄所拝借願や高雄丸払下げ願と同様に、出願者筆頭に大浦慶とある「起業同仁社」設立願が東京府知事松田道之へ出されたが、株主募集の方法が国禁の富くじに類するので再願しても認可されずに実現しなかった²¹。

「慶女の性格は豪放磊落で、細かい礼節にこだわらず、高価な珍しい器物も欲しい人がいれば与えて、少しも物惜しみしなかった。家事のことはすべて使用人に任せて、人を分け隔てせず、驕り高ぶったり媚びへつらったりすることがなかった。ふくよかな顔つきで爽やかな口調で話し、酒も飲まずタバコも吸わず、音楽や娯楽にも興味を持たず、ただ客人と自由気ままに話すことが好きだった。時に盛大な酒宴を開いて、集う人々に歌や踊で楽しく飲んでもらうことだけはあった。晩年は不遇であったと雖

も、各地の知名士が、彼女を陰ながら讃え黙って助けたので、一生涯安泰であったと言う。岩手の大畑重盛の第二子重治を養子としたが、その人が私に碑文を願ったので墓表の文章を作る」

養子重治について、本馬恭子『大浦慶女伝ノート』²²には、遠山事件裁判資料に出てくる「亥之二が重治に改名した可能性があるが確かなことは不明」とし、また阿野露団「大浦慶」²³には、「明治十三年岩手県大畑重吉二男重治を養子に入れる」と紹介されている。

養子縁組後の明治十五年（1882）五月には長崎海軍出張所御用達になっているので²⁴、この頃の大浦家の事業は、慶女に代わり同氏が経営していたと考えることができる。また慶女没後の長崎県茶業貿易商関連の長崎県事務簿には、「長崎区貿易茶業組合を油屋町大浦重治方に設置すべし」とあるが²⁵、旧土地台帳によると、同十九年七月に、油屋町一番地の居宅跡が松尾浅吉へ譲渡されており、この頃長崎を離れて福岡へ移った²⁶のであろう。明治四十年に福岡市貿易業組合が結成されて、その発起人になっている²⁷。

郷土史家林源吉「大浦慶女」には、「大浦家には慶女在世の頃より重治という子があった。慶女歿後事業の失敗か何かで名家の跡はさんざん荒らされ（略）夥しく所蔵されていた什器家財も、総て賣拂はれ、慶女愛用のもろ側、晝夜帯が長持一棹あり、黒縹子、紋縹子の唐渡りは特に多く、その当時婦人達の評判となった²⁸」とあることから、墓表の慶女晩年は家産が傾くとなっているのは、彼女自身に起因するというよりも、彼女から家産や事業を承継した養子の経営に起因していると言うべきであろう。

「昔、邑蜀に寡婦の清という女がいた。先祖が丹砂の出る穴を取得しその利益を独占していた。清はその家業を能く守った。そのために秦の始皇帝は女懐清臺を建築し、また司馬遷は『貨殖列伝』を書いて、この遠隔の地の寡婦を取り上げて君主と対等の人として、敬意を表しその名を天下に明らかにして称えた²⁹。

慶女の事と似ているが、清は財産を使って自分を守ったと言うに過ぎず、侵犯されなかっただけである。一方、慶女は大勢を見通し、身を危険にさらし貯蔵品を交易して国家の永年の利益に貢献した。このような志のある者は、困難な状況の中でこそ自らの志や目標を強く意識し、その志を果たすことができる。その最も傑出した人物は、優れた見識と積極的な意気込みを持っている。このような人物を髭をたくわえた立派な男性に求めても、なかなか居ないもので、寡婦の清といえども（慶女に）匹敵するような人物ではない。私は辞退せずに敢えて（大浦慶女を）表彰したい」

2. 記念碑建立計画

慶女記念碑建立計画については、明治二十五年十月十一日付「東京日日新聞」に、「大浦慶子の記念碑」の見出しで「大浦重治氏等発起となり長崎縣長崎市公園地に記念碑を建設せんと尽力中なりと云ふ」記事が掲載され、翌年八月二十五日付同新聞にも「女傑大浦慶子の碑」と題する似た記事がある。これに関連する地元新聞「鎮西日報」は、明治二十六年八月三十一日付「故大浦慶子記念碑の位置」の見出しで、「玉園山上八角堂の処に四十余坪の地所を得て建設せんとし出願中の処多分聞届けられざるならんと云ふものあり尤も今日頃何とか指令の筈なりと」更に翌月二十一日には、「故大浦慶子記念碑建設の場所は公園山中八角堂の近傍にせんとて過日来相続人大浦重治氏より長崎市長に出願し種々詮議の末市参事会の議にすることとなりしも昨日の同会は議論区々にして一定せず次会に譲れり」と見通しが暗い記事が続くが、その後の関連記事はなかった。当時の議事録を市議会事務局で閲覧したが、議題には挙がっていない、市参事会の記事録も残存していない。市長・助役・名誉職参事会員（6名）を以て組織された参事会での区々とした議論により、つい最近まで巷間言われてきた慶女の晩年没落不遇説が定説となった原因を知ることができたかもしれない。

このように長崎での建設計画が日の目を見ない中、四ヶ月後の東京の新聞に関連記事が載っている。明治二十七年一月十九日付朝刊の読売、朝日両新聞³⁰に、日本茶を米国へ初輸出した販路開拓の功績により、「今度全国茶業家の有志者は広く当業者より義捐金を募り地を上野公園内にトして一大記念碑を建設せんと目下計画中なりと」ほぼ同内容で掲載された。重治氏が全国茶業家の有志者へ相談したものかどうか不明であるが、こちらの碑も建つことはなかった。記念碑は従二位勲一等伯爵松方正義の篆額、従四位勲三等文学博士重野安繹の撰文、従四位勲三等一六居士巖谷修の揮毫になる唐金（青銅）鑄造で、建設予算は一万六千六百円³¹であった。この五年ほど前青山墓地に建てられた故東京府知事松田道之の碑が同じ重野安繹撰文で、義捐金など集金額二千九百円余り³²と比べても、いかに法外な額であり目標額に届かなかったことが推測される。

おわりに

以上、「大浦氏慶女墓表」を現代語訳して、主に晩年の活動を大浦希以（けい）・大浦慶の署名や人柄か油商の家柄かをほのめかす「常明」の印影がある裁判記録や明治政府官営工場の貸下げや所有艦船の払下げ公文書などと照合してきたが、依頼者の養子が伝聞した内容と思われるものについては、故人を過大に評価する余り、史実とはかけ離れて美化された点もあることを考慮しなければならない。また大切な書翰などは博学な八坂神社宮司小西成則翁が認めていたこと³³から、慶女の史料は老若二葉の

肖像写真や名刺などごく限られている。

今日21世紀の我が国社会における重要な課題である男女が平等な権利と機会を持ち、共に社会的・経済的な活動に参画するという男女共同参画社会の実現が提唱されている。かつて長崎県では彼女の幕末の活躍に因んで「大浦お慶プロジェクト」が事業展開されていたが、慶女晩年における有為な男性陣と組んでの事業活動を再評価すれば、彼女の生き様こそ男女共同参画社会の正に鑑であり先駆けであったと言える。

注

- 1 重野安繹士徳 著『成斎先生遺稿』巻8-9、松雲堂書店、1926年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1262373> 12-15コマ目
- 2 鈴木典子『池道之助日記』リーブル出版、2011年、84頁
- 3 石井孝「主要輸出入品の港別輸出入額」『幕末貿易史の研究』日本評論社、1944年、189-191頁
- 4 大塚良太郎 編『蚕史』下巻、大塚良太郎、1900年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/840640> 11-13コマ目
- 5 石渡繁胤述「本邦最初の輸出生絲」大日本蚕糸会 編『日本蚕糸業史』第1巻、大日本蚕糸会、1935年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1231332> 217コマ目
- 6 長崎の誤り
- 7 石井孝 前掲書（注3） 194,213頁-
- 8 『鹿児島県史料集』21（小松帯刀伝・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事）、鹿児島県立図書館、1980年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/9773451> 11,19コマ目
- 9 山崎正董 著『横井小楠伝 上』日新書院、1942年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1229979> 128-131コマ目
- 10 山崎正董 著『横井小楠伝 中』同 <https://dl.ndl.go.jp/pid/1874806> 152コマ目
- 11 高杉晋作 [著] ほか『東行先生遺文』民友社、1916年、14,16頁
- 12 大隈侯八十五年史編纂会 編『大隈侯八十五年史』1、大隈侯八十五年史編纂会、1926年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1875483> 145,200コマ目
- 13 徳富猪一郎「松方公年譜」『公爵松方正義伝 坤巻』公爵松方正義伝記発行所、1935年、19-23頁
- 14 同「坂本龍馬」『近世日本国民史』第100巻（明治時代）、近世日本国民史刊行会、

- 1962年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2995831>
171-174コマ目
- 15 「大隈参議一行灯台巡回日誌」早稲田大学古典籍総合データベース、1872年
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i14/i14_a3939/index.html
- 16 「四月廿五日大隈長官館スル所小島ノ宝亭ニ投ス」『使崎日誌』杉浦讓全集4巻、
1979年、35,36頁
- 17 『共進会報告』明治12年、勸農局[ほか]、1880年、国立国会図書館デジタルコ
レクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1089259> 2コマ目
- 18 『鎮西日報』明治三十七年十一月十八日・十九日
- 19 四月十三日の誤り
- 20 長崎市小学校職員会 編『明治維新以後の長崎』1925年、270-271頁
- 21 「本社設立願に付指令并再願書下戻 起業同仁社 大浦慶」東京都公文書館、1880
年 https://www.archives.metro.tokyo.lg.jp/detail?cls=collection_04&pkey=3124734
- 22 本馬恭子『大浦慶女伝ノート』本馬恭子、1990年、54頁
- 23 阿野露団『長崎の肖像 続』形文社、2002年、261頁
- 24 明治十五年五月十九日付「長崎県平民大浦重治御用達請書（元入第160）」アジ
ア歴史資料センター
<https://www.jacar.archives.go.jp/das/meta/C09103649200>
- 25 長崎歴史文化博物館蔵「製茶ノ部 明治17年 茶業組合一件」『長崎県勸業課農
務係事務簿』1884年
- 26 林源吉氏（長崎史談会）の話「お慶さんには養子の子息大浦重治氏が福岡にいる
が（略）」長崎日日新聞、昭和三十年九月十九日
- 27 福岡市編『福岡市史 第1巻（明治編）』福岡市、1959年、441頁
- 28 林源吉「大浦慶女」福田清人、本山桂川 共編『長崎文化物語』八弘書店、1941年、
257頁
- 29 司馬遷 著 ほか『史記平準書・漢書食貨志』,岩波書店,昭和17. 国立国会図書館
デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1061200> 43コマ目
- 30 「故大浦慶子記念碑を建てんとぞ」読売新聞、「故大浦けいの記念碑」朝日新聞
明治二十七年一月十九日朝刊
- 31 大塚良太郎編 前掲書（注4） 12コマ目
- 32 「東京日日新聞」明治二十一年七月六日『新聞集成明治編年史 第7巻』1935年
102,103頁
- 33 林源吉 前掲書（注28） 257頁

大浦氏慶女墓表

大浦氏名慶長崎人其先世住越前足利將軍時與上杉氏戰有功賜武藏入間郡居大浦城因氏焉子孫仕肥後侯加藤清正食祿一千七百石及忠廣創封移長崎業商是爲四郎左衛門信綱信綱管長崎賣油事稱油座方聲望重于西海數傳至大右衛門羅災實財湯盡大右衛門歿子太平次早死有一子爲價其妹適白井某生一女使之入承外曾祖之家即大浦氏也大浦氏爲人毅而敏慨然有興復家道之志年十五六得少資賣油因拮据經營家產稍殖納天草人道田某爲贅婿大浦氏謂委身事夫每事受制竟不能伸大志乃請某離婚決意棲居世稱曰大浦廢婦自幕府布海禁限清國二國貿易長崎商貨有定額嚴禁私商犯者處極刑大浦氏密行私商獲利頗大意謂商猶戰也戰莫先於知敵今彼知我而我不知彼彼明而我暗勝敗之數易觀耳方今貿易多輸入少輸出坐待彼來利獨歸於彼耳若甘區區小利以是自足將奈國家百年大計何於是欲航海外大興貿易潛託閩人狄吉司他魯者送肥前轄野產茶廿七斤於英米及阿刺伯三國彥根生絲於英米伊三國以試其售否如何本邦輪國產於歐米各國是爲嚆矢實嘉永六年也會英船到長島大浦氏密致己意其士官納身木匣混於貨物之中夜載其艦時年二十六當時邦人不通海外事情畏外人不啻鬼魅而大浦氏以一女子毅然不顧犯極刑以航異域可謂偉矣哉至印度洋得病不果而還偶與英商啞魯托同船啞示以日本茶一包即嘗託閩人者也大浦氏異其奇遇及還長崎深相結託因以輸茶於各國旁及絲蠟轉貨運貨常不下數十萬金雖事屬詭秘勢力隱然動海外互市之端於是啓矣安政五年通商條約始

成各國爭來互市我諸買倘然失措獨大浦氏計熟慮慣處之練然乃派人於西海三陸二羽近江等處得茶一萬斤絲若干輸茶於米國絲於英國然邦人未知茶絲之利於貿易收集極難大浦氏患之勸獎誘導使諸州培茶養蠶以擴供給販賣之途至是內外貿易之權皆歸其手大浦廢婦之名噴噴於遠近當是時幕府政衰物論喧騰志士流寓長崎者大浦氏悉與納交陰依其事屢往復京師大坂之閒尤與小松坂本橫井高杉大隈松方陸奧諸氏親管夜行過街衝有自背後擊之者乃仆傷掌及腕帶截爲兩斷刃不及身創亦尋痊既而王政革新管所資助諸氏皆列顯要大浦氏規圖滋大開炭礦造船艦起米商勸業諸會社製磚茶凡其所計畫創設不一而足而志業連蹇家產寢衰尋罹病以明治十七年四月十七日歿年五十七葬長崎長照寺先塋之次先歿數日官賜書褒其以婦女之身率先外輸之功大浦氏性豪宕不留意於細禮末節巨資珍奇有乞輒與不少吝惜其家事舉委之僕從與人設珍城無驕矜諂媚之態貌肥而言爽不飲酒喫烟凡諸聲樂瓶好無一所嗜好惟以對客縱談爲快時置酒高會使衆歌舞歡飲而已雖晚節踈踈四方知名顯達之士陰贊默助終身保其享泰云養嚴手人大如重盛二子重治爲嗣重治乞文於余表其墓昔者巴蜀寡婦清其先得丹穴擅利清能守其業泰始皇爲築女懷清臺司馬遷作貨殖傳稱其以窮鄉寡婦體抗萬乘名顯天下大浦氏事殆類焉然清不過日用財自衛不見侵犯而已大浦氏洞觀大勢身膺危難之衝居貨懲懲開國家百世之利若夫知志士於窮厄之中使之成其志業則其尤卓卓者識見之明志氣之邁求之於鬚髯男子不易多得而非寡婦清所能企及也吾故不辭而表之

参考文献

※ (NDL D.C.)は国立国会図書館デジタルコレクションの略です。

阿野露団『長崎の肖像 続』形文社、2002年。

生熊文「幕末のドイツ商人カール・ユリウス・テクスター」『日独文化交流史研究』日本独学史学会、1998年。

石井孝『幕末貿易史の研究』日本評論社、1944年。

石田孝「新説大浦慶女伝 お慶さんの後半生記」2022年。

大隈侯八十五年史編纂会 編『大隈侯八十五年史』1、大隈侯八十五年史編纂会、1926年。(NDL D.C.)

大塚良太郎 編『蚕史 下巻』大塚良太郎、1900年。(NDL D.C.)

織田毅『海援隊秘記』戎光祥出版、2010年。

『鹿兒島県史料集 21』(小松帯刀伝・薩藩小松帯刀履歴・小松公之記事)、鹿兒島県立図書館、1980年。(NDL D.C.)

- 『共進会報告 明治12年』勸農局[ほか]、1880年。(NDL D.C.)
- 坂崎斌『陸奥宗光』博文館、1898年。(NDL D.C.)
- 重野安繹士徳 著『成斎先生遺稿』巻8-9、松雲堂書店、1926年。(NDL D.C.)
- 杉浦讓『杉浦讓全集 第4巻』杉浦讓全集刊行会、1978年。
- 杉山謙二郎『明治を築いた企業家 杉山徳三郎』碧天舎、2005年。
- 鈴木典子『池道之助日記』リーブル出版、2011年。
- 大日本蚕糸会 編『日本蚕糸業史』第1巻、大日本蚕糸会、1935年。(NDL D.C.)
- 高杉晋作『東行先生遺文』民友社 1916年。
- 田川永吉『女丈夫大浦慶伝』文芸社、2010年。
- 徳富猪一郎『公爵松方正義伝 坤巻』公爵松方正義伝記発行所、1935年。
- 徳富猪一郎『近世日本国民史』第100巻(明治時代)、近世日本国民史刊行会、1962年。
(NDL D.C.)
- 長崎市小学校職員会 編『明治維新以後の長崎』長崎市小学校職員会、1925年。
- 『文華』(1) 文華雜誌社、1893年。(NDL D.C.)
- 干河岸貫一 編「大浦慶女」『日本女子立志編 下巻』博文館、1902年。(NDL D.C.)
- 福岡市編『福岡市史 第1巻(明治編)』福岡市、1959年。
- 福田清人・本山桂川 共編『長崎文化物語』八弘書店、1941年。
- 古谷昌二編著『明治産業近代化のパイオニア 平野富二伝』朗文堂、2013年。
- 本馬恭子『大浦慶女伝ノート』本馬恭子、1990年。
- 山崎正董 著『横井小楠伝 上』『横井小楠伝 中』日新書院、1942年。(NDL D.C.)
- 『横浜市史 第3巻上』横浜市、1961年。(NDL D.C.)